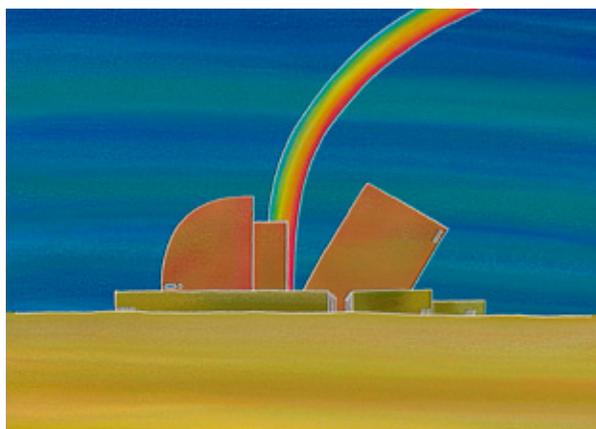


# Allegoly Town

---

--- アレゴリータウン ---



絵とことば Minori Eguchi

# Allegoly Town

--- アレゴリータウン ---

絵とことば    Minori Eguchi

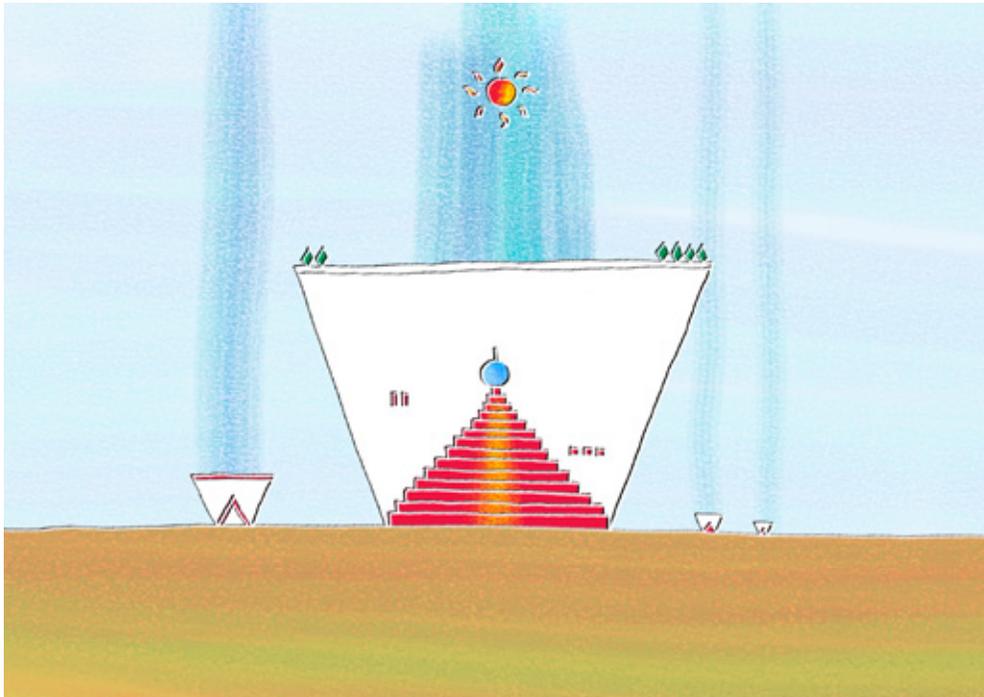
なんの鍵だかわからない鍵、出てきたことはありませんか？

イラついていた。

いくら探しても引き出しの中にあの伝票が見つからない。今月の経理の締め切りは今日だ。見つからなければ57,000円も立て替えがかえってこないことになる。モノの管理の悪い性格をのろった。それにしても、いつまでも仕事に引き出しをゴソゴソしているわけにもいかない。また後で探そうと思った時に、ふと目にとまったものがあった。鍵だった。

何の鍵だろうか？ 引き出しの？ いや、形状が違っている。会社に私物で鍵付きのものなんて、何か持ってきていたかなあ？ 思い当たらない。だいたいこんなかたちの鍵、持っていたんだろうか？ とにかく、一息入れよう。

気分が悪かった。伝票のことは当然として、伝票の件以前から、いやな気分だったんだ。屋上でコーヒーでも飲んでこよう。ボクは、誰にも呼び止められないよう祈りながら席を立った。トイレにでも行くようなそぶりだ。



空の鍵穴

屋上は少し肌寒かったが、よく晴れた青空が気持ちよかった。

ボクは手すりにもたれて遠くを眺めながら、缶コーヒーの口を開けた。自販機の「あたたかい」コーヒーはいつもと同じにぬるかった。

会社、やめたいな。

今思いついたことじゃない。ずっと前から考えていたことだ。ただ、用意周到な性格じゃないボクは、やめた後の具体的な計画を立てられずにいた。勢いで辞めたら後が続かないことは予想できた。何とかなる、と、開き直る度胸もなかった。何も変えられないまま時間だけ過ぎてしまう実感がたまらなかった。こぶしに力を入れた。そして、手の中に、あの鍵のあることを思い出した。

もう一度まじまじと見つめてみたが、いったい何の鍵か、まったく思い出せない。もしかしたら、ボク以前にあの机を使っていた人のものかしら？ いや、そんなことはない。今のフロアに移動になったとき、机の中は確かに空っぽだったし。じゃあ、ボクのものなんだろう。ホントにボクのもの？ そんなこと、どうでもいいや。ああ、どっかに行きたいなあ。この屋上から見えない向こうに……

あれ・・・

ボクはあまり目が良くない。だから最初、眼鏡の汚れで世界がゆがんでるのかと思った。だって見覚えのない建物が、空にひらひら、ゆらめいて見えたんだ。それは半透明で奥の景色が透けていた。その上、すごく遠くにあるようにも、手を伸ばせば届くところにあるようにも見えていた。

ボクは眼鏡を外してレンズをハンカチで拭き、もう一度かけ直してよく見てみた。やっぱり、それはあるように見える。しかも、すぐ目の前に。建物、なんだろう？真ん中あたりに、鍵穴みたいなものがある。

冗談だろう。この鍵なんか、丁度良さそうだ。

ボクは試しに持っていた鍵を差し込んだんだ。そしたらそれは、開いてしまった。

次の瞬間、ボクは行列に並んでいた。

手にしていたはずの缶コーヒーは、真っ赤なクランベリージュースに変わっていた。行列の先をたどると、まるでサーカスでもやっていそうな大きなテントがあった。ボクは前の人に「あれはなんのテントなんですか？」と聞いてみた。振り向いてくれたが、シートのようなものを頭からすっぽりかぶっていて、何をしゃべっているのかまったく分か



時空の天幕

らない。見回すと、ボク以外の人はみんなシート人間だ。人間、なのか？こんな状態でよく裾を踏みつけて転ばないものだ。正体不明の行列はボクを挟み込んだまま、ゆっくりとちゃんと進んでいった。

テントの中は大きな映画館のようだった。そう言えば、遙か彼方からの電線が電柱に導かれて届いていたっけ。行列は順序よく座席について、ボクはかなり後ろの方ではあったけど、中央からスクリーンを見られる位置に座ることができた。何となくラッキーな気分だった。ほどなくして座席は全部埋まり、入り口になっていたテントの裾が閉じ

られて、会場は真っ暗になった。そして、カラカラカラと、乾いた機械音がして、ぼんやりと前のスクリーンに何か投影されはじめた。ピント合わせでもしているようで、なかなか像を結ばない。ボクはシート人間が、シートをかぶったまま見ているのか気になって、そっと横目で隣を盗み見した。やはりシートをかぶっている。理解しがたい。ボクは持っていたクランベリージュースを一口飲んだ。

その瞬間、パチンッと大きな音がしてすべてが光に包まれた。

ボクは突然、砂漠に立っていた。



虹の始まる場所

最初ごくかすかにしか見えなかった虹は、歩くにつれて少しずつ色がハッキリしてきて、そして、その虹の始まりに、虹が大地に届くあたりに、町のようなものがあるのが小さく見えてきた。ボクはとにかくそこに行くことにした。

その町は城壁に囲まれてはいたが、門は開かれていた。ボクはちょっと警戒しながら、門の中に足を踏み入れた。

「すみません。誰か居ませんか？」

こう叫ぶのはもう何回目だろう。この町には人は誰もいないようだ。人どころか、動物も、植物も見あたらない。ここはどこなんだろう？ と、思った瞬間、ボクはどこにいるのだろうか？、と問いかけるべきか、なんて、つまらないことを考えたりしていた。どうせなら、見晴らしの良いところに行こうじゃないか。ボクは高い建物の上を目指して階段を上り始めた。さすがに歩き疲れてきていた。大事に飲んでた Cranberry Juice も、残りは少ない。それが心細さに拍車をかける。とにかく、高いところからこの町の全景を見たい。それだけ考えるようにして、こつこつ階段を上った。おそらくここが最上階なんだろうという階段の頂上には、扉が一つついていて、ボクはためらわずに開けた。

360度、空だった。空と大地の境界は、陽炎がじりじりとゆらめいていて、どこから空でどこから大地か、明確な線引きなどできそうもなかった。決して暑かったわけではないのだが、水が心配になった。Cranberry Juice はちゃんと持っている。何もないよりましだけれど、水の方が良かったのになと、思わずにいられた。なかった。

どっちに行こうか。ここにいてもどうにもならないだろう。当ては何もない。どのみち星空だったとしても星座なんか知らないし、太陽の出ている方が南、いや、南半球に来てしまっていたなら、それも当てにならない。良くも悪くも、持っているのは Cranberry Juice だけ。ボクは深呼吸をしながらゆっくりと空を見上げた。綺麗だ。吸い込まれそう。でも、どうして僕は空に落ちこちていかないんだろう。どうしてボクの足の裏は大地に吸い付けられているんだろう。もしかしたら、今のボクは、空より、より大地に愛されているってことなのかなあ。いつか、空の方がよりボクを必要としたなら、空に落ちていけるのかなあ。あつ、虹みつけ。とりあえず、虹をたどってみようか。ボクは歩き始めた。

中は小さな部屋で、中央にはなんだかともなく大きな望遠鏡のようなものが据えられていた。窓はないのかなあ。あった。角の方に三角形の窓が並んでふたつづいている。ボクはまっすぐ窓に向かって歩いた。ガラスは嵌め殺して開かないようだ。隣の三角錐の形の建物が下に見える。もっとほかの方向を見たかったが、窓はこしかなかった。町の外はずっと砂漠で、ひたすらに空だった。ただ辺りは静かに夕暮れの気配、正直、がっかりした。

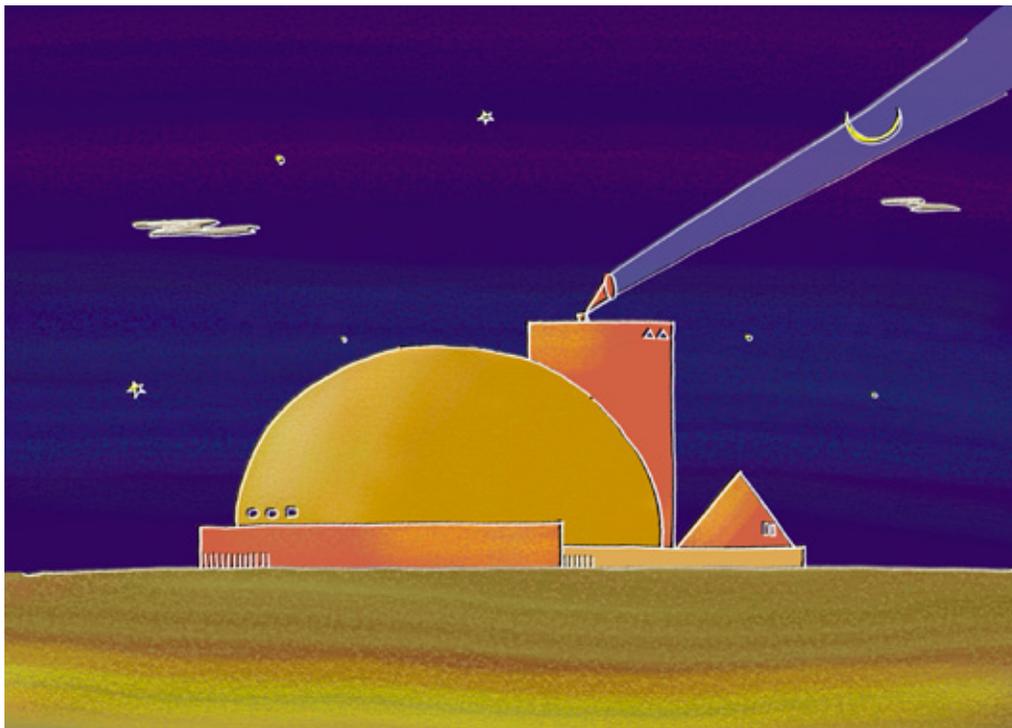
降りようかと思って振り返ったときに、望遠鏡のようなものに、何かメモ

紙が留めてあるのに気がついた。読んでみると

「ようこそ、新しい月の番人。きみの仕事は夜の間に、月がちゃんと輝いていられるように、この大型ライトで照らし続けることだ。」

誰か来ることになっているのか？ じゃあ、その人をここで待ってみよう。それにしてももう日が暮れてしまう。その人が来るまで代わりに仕事をしてあげようか。

メモをはがすと赤いボタンがあった。どうもこれが点灯スイッチのようだ。月はどこにあるんだろう。望遠鏡をのぞくとちょうど真ん中に三日月が入っていた。ちょっと待てよ、月なんて動くのに、この装置はととも動きそうもないじゃないか。スイッチ入れたら同調して動くのかなあ。もうかなり暗い。新しい月の番人は遅れているらしい。ちょっとボクが代わりにスイッチを入れてあげようか。でも、勝手にいじって怒られないかなあ・・・大丈夫だろう・・・月の輝かない夜があるよりはましなんじゃない。ボクは赤いボタンを押した。



月の番人

望遠鏡の中の月が冷い輝きを放った。

そのとたん、今までボクしか居なかった部屋に、たくさんの人が現れた。ボクは面食らって、心臓が止まりそうだった。人々はみんな正装をしていて、すごく感激している様子で我先にとボクに握手を求めて、抱きついて感涙にむせったりと、いったいどうなっているんだ？ その中の貫禄のある偉そうな紳士が、うやうやしくボクの胸にバッチをつけた。何のバッチ？ 「月の番人」えっ、ボクが？ どうして？ 紳士はボクの前にグラスをつきあげて乾杯の仕草をした。はぁ？ でも、ボクにはグラスがない。いいか、クランベリージュースの瓶をかかげた。失礼にならないかなあ、紳士はにこにこしていた。大丈夫なようだ。

こうして、ボクは月の番人をするようになった。

ボクは、この建物の最上階に住んでいる。もう何日になるのか。ホテルなら一番高い部屋？ でも、ここはただの月の番人用の宿直所。ここで暮らすうち、だんだんこの町のこともわかってきた。ちなみに、この月は満ち欠けはするが動かない。町の人たちは、夜、ライトに照らされた月の反射光でしか姿を見ることが出来ない。日光の差す間は誰も見えない。彼ら自身も、何も見えならしい。見えないだけじゃなく、「存在する」ということが、出来ないらしい。だから彼らは自分たちではボタンを押すことが出来ないのだ。「存在している者」が、ボタンを押して、ライトが月に反射されて、初めて存在出来るのだから。ボクは彼らに必要とされていることがちょっと心地よかった。ベットの堅さもボク好みだし、支給された制服のセンスも悪くなかった。彼らの言葉は全く理解できなかったけど、身振り手振りで多少は意志の疎通も図れた。そのうち、言葉も覚えられるかもしれない。ただ、どうしても我慢できないことが一つあった。

克蘭ベリージュースだ。

彼らは食事をしない。みんな自分のグラスを持っていて、その飲み物を飲むだけらしい。そしてボクに割り当てられたのは、あの乾杯してしまった克蘭ベリージュースなのだ。この瓶のジュースは、飲んでも飲んでも無くならない。そしてこれしかない。もう、ボクは克蘭ベリージュースだけは、一口も飲みたくなかった。ああ、何でこれは水じゃなかったんだろう。水だったらまだ我慢できたかもしれない。もうボクは餓死する覚悟で克蘭ベリージュースを拒否するか、この町を出るか、方法がないように思っていた。ただ、ボクを当てにしている彼らが気がかりだった。そんな気分で今夜もスイッチを入れようとしたときに、扉をノックする音がした。へっ、誰？ こわごわドアを開けると初老の男性が立っていた。ピンときた。この人が「新しい月の番人」なんだ。ボクはすぐにバッチをはずして、彼の胸につけた。そして、手を引いて部屋の中央に連れて行き、彼の指を赤いボタンに押しつけた。

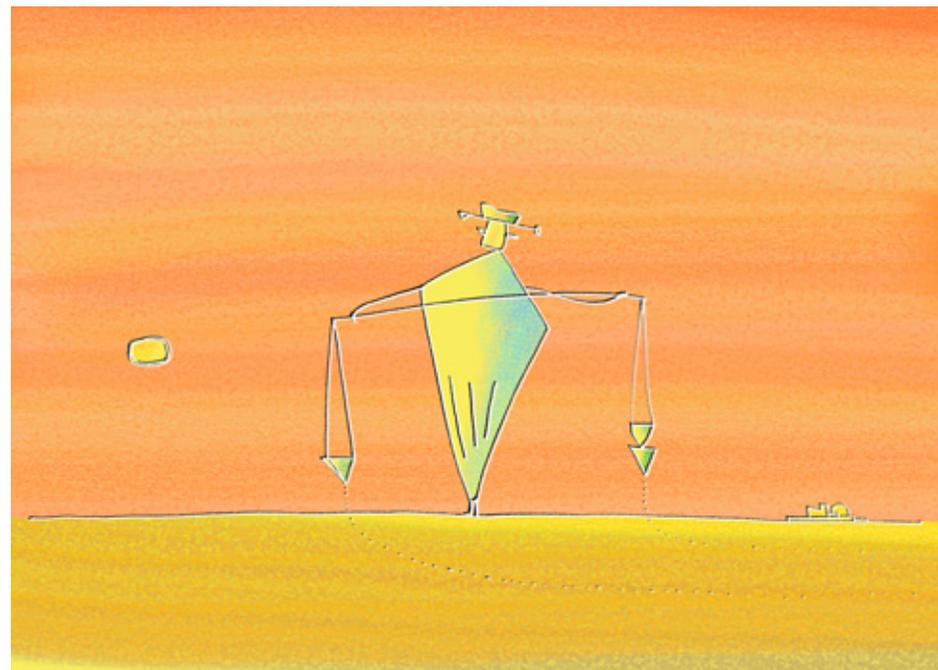
次の瞬間、そこにはボクが初めてボタンを押した時の光景が再現されていた。初老の男性は彼らから祝福を受け、戸惑っているようだった。ボクは、ここでのボクの仕事が終わったことを感じた。もう、ここを出てもいいんだな。彼らに気づかれぬよう、そっと部屋を出て、足音を忍ばせて階段を下りていった。

建物を出て空を見上げたら、夕焼けで空が赤く染まっていた。ライトは点灯されて月は輝き始めていたけど、日光もまだ届いているので、外には誰も居なかった。ボクは今のうちと思って、足早に門の外に向かった。砂漠は広々していた。なんだか、開放感があった。しばらく歩いていくと、向こうの方に人影がある。ボクは手を振ってみた。気がつかないらしい。ボクはその人に向かって歩いた。

その人はとてもゆっくり歩いているようで、ボクはどんどん近づいた。近づくにつれて、その人が大きな天秤を担いでいることがわかった。一足ごとに天秤に下げたもので、ちゃんと地面をつつく。するとそこに小さな植物の芽が生える。

よく見るとその人の後ろは延々と芽の列が出来ている。

「こんにちわ。何をしていますんですか？」



種蒔く人

ボクは思わず声をかけた。

「種をまいているのさ。」

返事が返ってきたことに、返事の言葉がボクに理解できたことに、ボクは鳥肌が立った。

「ボクの言葉、わかりますか！」

初めてです、ここにきて話のできる人に会えたのは！」

「それは君が、心で話をしなかったからじゃないのかい。」

「えっ、それは・・・」

「まあ、それは別にどうでもいいんだけどね・・・」

ちょっと面食らったが、気を取り直してもう一度訊いた。

「なんの種なんですか？」

「今の種だよ。」

「今の種？」

「そう、今この瞬間の種。この瞬間の種をまくと、その前にまいた種は、さっきの種になり、さらにその前にまいた種は、ちょっと前の種になる。」

「でも、みんなすぐに芽が出ていますよ」

「種には芽が詰まってるからね。はち切れてすぐにでてくるんだ。でも、ちゃんと育つのは極わずかでね。大半は、芽のままで化石になってしまう。」

「ずっと蒔いているんですか？」

「そうだよ。」

「疲れないんですか？」

「疲れない早さでやっているからね。」

「種がなくなったらどうするんですか？」

「私がいる限りは、私の種はなくなるのさ。」

「いったいそんなにたくさんの種、どうしたんですか？」

「君だって持ってるじゃないか。その瓶の中に」

「えっ」

なぜかボクは、例のクランベリー瓶を、まだ握っていた。そして中にはジュースの代わりに、小豆のような種がいっぱい入っていた。

「君は、「今」をなくしてしまっているから、種を蒔くことが出来ないでいるのさ。君は種を持っていることに気がついてなかったんだね。」

君はその種をどうしたいんだい？　ここに蒔くかい？

まだ持っていたいかい？

種は蒔かれれば芽を出すし大事にすれば葉も茂るだろう。風が葉を揺らせば音が物語を紡ぎ出す。君の種から生まれた君の物語だよ。」

「ボクの物語？」

「世界はね、昔の今と、今と、これからの今で出来てるんだ。今を見失った君は、君の世界全部を見失ってしまったんだよ。」

今君がすることと、今君がしないことが、君自身を作っているんだ。君の種を蒔くことも、蒔かないことも、どちらも間違いじゃない。

ほら、急がないと太陽がすっかり沈んでしまうよ。城壁の外ではライトの月の照り返しが届かないから、君は夜に飲み込まれてここから出られなくなってしまう。彼らのようにね。すぐに太陽に向かって、まっすぐに歩いていくんだ。太陽はびっくりして、君の姿をよく見ようと、君の真上にやってくる。そうすれば明るくなって、どこに今の扉があるか見つけられるはずだから。ほら、急いで」

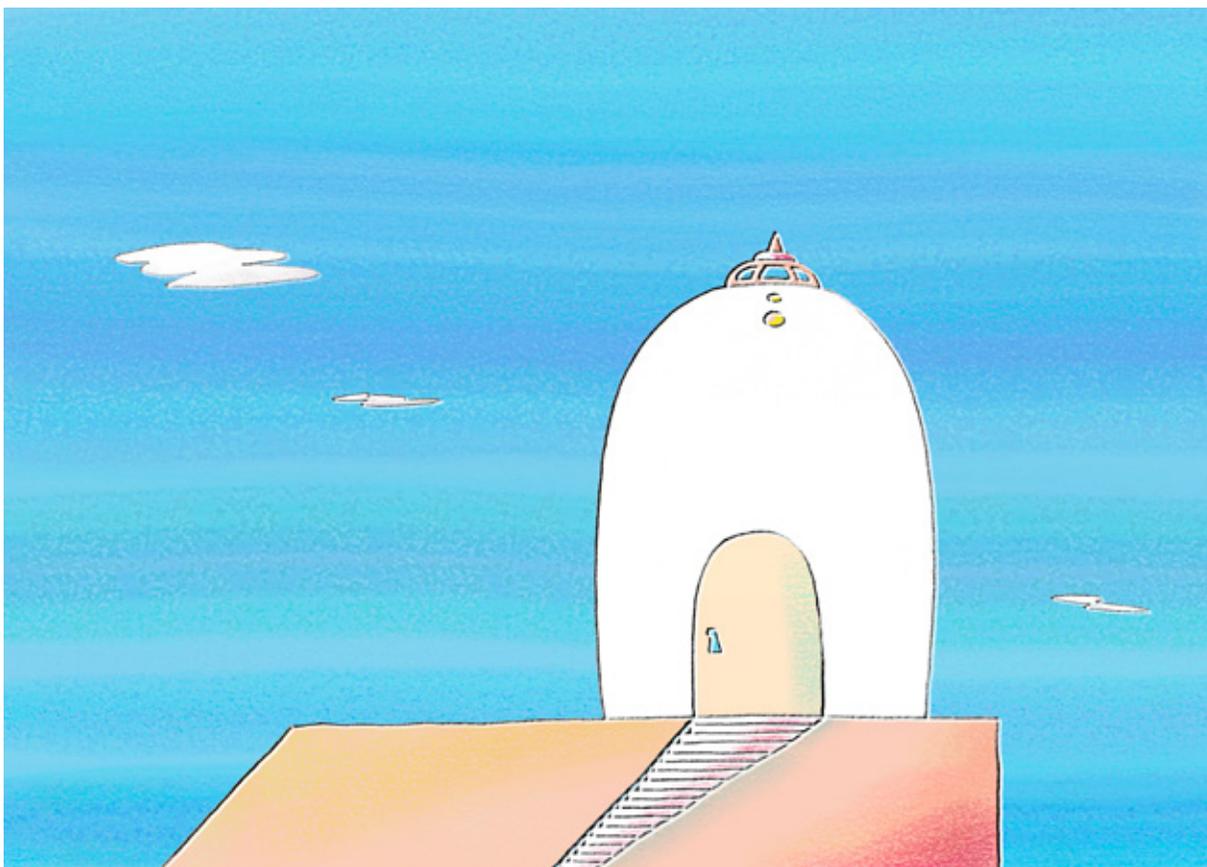
ボクにはそんな話、よくわからなかったし、とても全部本当だなんて思えなかったけど、なんだか、そのとたんに、すごく急がなくちゃいけないような、焦った気持ちにはなってしまったんだ。そして言われるままに、太陽に向かって歩き始めて、それからすぐ振り返ってその人に訊いたんだ。

「ここはどこなんですか？」

「アレゴリータウンだよ。いろいろなものが流れ着いて、また旅立っていく、すべての境界線の町さ。」

「ありがとうございました。」

それっきりボクは、振り返らなかった。



君待つ扉

その人の言うように、しばらく歩くと夕焼けだった空がだんだん青空に変わってきて、沈みかけていた太陽がどんどん空へ昇ってきた。そしたらボクの行く先に小さな建物が見えてきた。

外に階段が着いていて、その上に小さなドームのようなものがあり、扉がついている。あれのことなんだろうな。

ボクはまっすぐそこを目指して、躊躇なく階段を上った。そして扉を開けた。

下に続く階段が見えた。あれっ、見覚えのある、ちょっと待って、この扉って・・・ボクは開けた扉を振り返った。  
そこは会社の屋上だった。ボクが開けたのは、会社の屋上の扉、そしてボクは屋上から降りようとしていた。  
んっ、ボクは何処に居た？

「あ～あ、こんなところに居た。お前、経理の田中さんが探してたぜ。精算、まだ出てないって」

「やばっ、行方不明になっちゃった伝票があつてさあ。」

「57,000円だろう。こないだ俺に回した書類に挟まってたから、机の上に置いておいたよ。」

「ホントかよ！ 助かったよ！ ありがとう！」

「あれえ、そんな瓶のジュース、ここの自販機で売ってたっけ？ めずらしいじゃん。いつも缶コーヒーばかり飲んでるのに。  
なんのジュース？ クランベリー？

おしゃれだねえ。果汁どんくらい入ってるの？ んっ、なんか書いてある、

【あなたの今のお仕事の味】 だって！ 随分甘くておいしそうな仕事じゃん！ うらやましいなあ！」

「・・・・・・・・」

思い出したくもないクランベリージュースの味が、口の中に広がった。

仕事なんて、他人からはそう見えているらしい .....

# Allegory Town

--- アレゴリータウン ---

絵とことば <sup>みのり</sup> 江口真代

2000.10

Copyright Art Farm Cieloni

無断転用・転写を禁じます

<http://www.cieloni.com/m>